巻頭言

複眼的な見方の重要性

水文・水資源学会は、2012 年 8 月 6 日の設立総会において一般社団法人として再出発いたしました。この任意団体からの法人への移行にあたっては、定款、細則の作成、法人登記、役員選挙など、さまざまな重要な手続きが必要でした。この気を遣う作業を完璧に遂行くださった、椎葉充晴会長、法人化特別小委員会委員長を務められた窪田順平総務委員長をはじめ、第 12 期の学会役員のみなさまのご尽力に、心から厚く感謝申しあげます。法人最初の第 13 期会長をお引き受けすることになりましたが、会員のみなさまのご協力をいただくことによって、本学会の発展に努力いたしたいと存じますので、なにとぞよろしくお願いします。

さて、本学会は 1988 年に、水災害や水利用の研究が工学、農学、林学、地理学、気象学、陸水学、社会科学など、多数の学問分野に個別に担われてきたことの問題点にかんがみ、学際的な研究交流活動を求めて発足しました。この 25 年間、「水循環」「水問題」を議論し合う場を創ってまいりましたが、研究情報交換はもちろん、大学で学んだ分野と異なる研究分野に進出してその分野の専門家と議論する多くの優れた研究者を輩出するなど、多大な教育的な成果も挙げてきました。

しかしながら、社会の変化は、こうした学際交流を超え、より統合された水に関する研究の取り組みを必要としているようです。人間活動が地球規模に拡大して生じてきた温暖化等の環境問題は、ちょうど本学会発足頃から学問の焦点になってきていましたが、今や、ICSU（国際科学会議）が掲げる Future Earth で強調されるように、地球はすでに人間活動によって限界を超えたシステムに変化しそうになっています。そして、水災害や水資源にかかわる問題の複雑性は増し、互いに絡み合って生じています。また、こうした課題に取り組む研究プロジェクトのありかたにおいても変化があり、G8 各国のファンディング組織から成るベルモントフォーラムは、水の安全保障など重点的なテーマを決めて重点的な予算支出を指向しています。本学会は、学際的交流のレベルを超え、個々の分野で処理しきれないような複雑な水問題に対する学術研究の受け皿としての役割を担う必要があるといえましょう。

こうした背景を受け、水研究への取り組みを改善する試みとしては、すでに 2012 年 10 月 15 日に、日本学術会議 IAHS 小委員会、日本ユネスコ IHP 分科会共同主催で、「Japan Water 2012」という会議が開催され、議論を始めています。そこでは、水関係の国際組織、各学会、大学、研究機関、各省庁の取り組みが報告されるとともに、ポスドクなど若手研究者のキャリアパスの開拓などが議論されました。多様な問題を陽に取り上げて検討すること自体が初めての試みでしたが、これを継続して、水に関する諸問題に対応できる学術研究を探って行くことが重要だと考えられます。水文・水資源学会誌や各種の企画事業においても、会員が日頃考えている問題意識やアイデアを、オープンな議論に載せることを、ぜひ望みたいと思います。

国際的な活動としては、IAHS、IHP、APHW での活動、中国・韓国との交流などが引き続き重要ですが、会員の研究の国際的な発信を学会として支援するうえで、とりわけ、オープンアクセスジ

ャーナルとして刊行している本学会の Hydrological Research Letters の発展が鍵となると考えます。国際誌については、アメリカの AGU,、ヨーロッパの EGU に相当する日本地球惑星連合（JpGU）でも、その発行やあり方が議論されています。JpGU との連携は年々重要性を増してきており、「水」の国際発信において具体的にどのようにするのが良いか、積極的に検討してゆきたいと考えています。

日本学術会議ではまた、大型研究計画マスタープラン改定の動きがあり、これも JpGU を通じた対応が求められてきています。2010 年に行われた作成作業では、水関係のプランが含まれなかったのですが、今回は重要な学術テーマすべてについて、学会を含む機関レベルからの提案をとりまとめることが予定されています。水文・水資源学会の活動が社会において重要であることは言うまでもないですが、先端的な基礎研究が現に展開され、大きな広がりを持つ研究分野のひとつでもあるわけですから、それにふさわしいサイエンスとして魅力ある提案が求められます。

次に、本学会にとっての複眼的な見方の重要性について、少し掘り下げて考えてみたいと思います。まず、研究発表会、学会誌、企画事業を通じて行われる、成果発表や討議のあり方を取り上げます。初代の編集出版委員長であった日野幹雄先生は、誤りのないことや重複のないことは必要だとしても、意見が異なることを理由に論文をリジェクトしないこと、また貴重な観測データを表に出すことを尊重されました。この精神は受け継ぐべきであり、若い方も、先生や先輩の意見にとらわれ過ぎずに率直な意見を論理的に表明することが望まれます。また、それに対する冷静で包容力ある受け止めも不可欠です。詳細な観測・解析への集中は良いとしても、少し後ろに目線を引いて見直すという複眼的な観点を加えた議論は、研究パラダイムの進化に必要なプロセスですが、われわれ日本人はやや不得意なのではないでしょうか。学会は、何よりも自由な議論の場であるべきことを再認識したいと思います。

複眼的な見方は、水に関する社会問題への対応においてこそ、とりわけ重要です。本学会がかかわる研究は、悲惨な水災害、水が得られない苦しみ、こうした厄災と貧困との密接な関係など、たいへん重い現実にかかわっています。2011 年に発生した東日本大震災や国内外の水害では、自然力のあまりの巨大さに対して研究によってできる範囲は限られていることを痛感しました。水に関する研究の社会的な意義は、便利な工業製品やおいしい食品を開発するような研究とは異なり、解決しにくい課題に取り組むところにあります。そういう意味では、個体生命の有限性が自明であっても難病治癒に挑む医学に似ています。しかし、医学とは違って、水は昔から上下流対立をはじめとする紛争の種になってきており、空間的な位置・社会的立場によって利害が異なる特徴のため、処置方法が混迷・苦渋に巻き込まれやすいといえます。さらに、時間的な観点から、短期的な解決目標と将来の展望が対策において一致しない場合もあるでしょう。こうしたことから、本学会が複雑多様な現実を前にして提案できる手段は、複数になる場合が多いはずです。基礎研究の成果を重視するのは当然ですが、ひとつの解決策に収斂させることができなくても、複眼的な見方を尊重したうえで大胆に社会の水問題にかかわることが大切だと思います。

最近、IAHS では、「万物は流転する」という、ギリシャの哲学者ヘラクレイトスの Panta Rhei が新しいテーマとして論じられています。現在のランドスケープや水循環特性が過去の変化の結果として現れているとの視点が注目され始めているわけです。しかし、ここで意識されている、短期間における定常・循環と長期間における進化・発展の概念は、まさに生物進化から得られる概念で、万物流転についての、西洋的な一側面であるように感じます。すでに述べたように、水問題を完全に克服することは不可能です。わたしたちに可能なのは、災害撲滅ではなく「減災」であることから示唆されるように、複眼的な見方を基にしてチャレンジし続けることです。研究と社会との関係において底流するものは、「進化」よりは、平家物語冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」で示される東洋思想に近いと、私には思えてなりません。会員のみなさまのさまざまな観点からの議論を期待して筆を置きます。